

アメリカの人種差別と恐怖

● 吉田信夫

Martin Luther King, Jr. は *Stride toward Freedom*¹ のなかで次のように述べています。

Men often hate each other because they fear each other; they fear each other because they do not know each other; they do not know each other because they cannot communicate; they cannot communicate because they are separated.²

人々が互いを憎み合うのは、互いに相手を恐れているからである。彼らが互いに恐れ合うのは、互いに相手のことを知らないからである。彼らが互いを知らないのは、コミュニケーションが出来ないからである。彼らがコミュニケーションをとれないのは、彼らが分離されているからである。

堂々巡り、悪循環ということに関しては、Malcolm X のことばの方が良く知られているでしょう。

When you live in a poor neighborhood, you're living in an area where you have to have poor schools. When you have poor schools, you have poor teachers. When you have poor teachers, you get a poor education. With a poor education, you can

only work on a poor paying job. And that poor paying job enables you to live again in a poor neighborhood. So, it's vicious cycle.³

貧しい地域に住んでいれば、貧弱な学校に行くことになる。貧弱な学校に行けば、貧弱な教師に当たる。貧弱な教師に当たると、貧弱な教育を受けることになる。貧弱な教育を受けたのでは、ペイの良くない仕事にしか就けない。ペイの良くない仕事に就けば、貧しい地域にしか住めない。悪循環だ。

King も Malcolm も優れたコミュニケーターですが、ここでは、とりあえず、コミュニケーションに言及している King のことばを見てみます。“Men” という単語を、“people” の意味で用いていることは、女性への respect が欠けているという点で、たとえ時代性を考慮しても、言い訳の余地はありません。Malcolm X についても、男女平等の意識の欠如という非難は免れないと思われまます。ただし、ここでは、その点に関してこれ以上触れないことにして、前述の King のことばを考えてみます。

まず、時代背景を考えると、引用の最後の部分、“because they are separated” は、King の最も言いたかった部分でしょう。同時に、King は、“because they fear each other” の部分も強調したかったと思われまます。アメリカの人種差別において、“fear” は最も重要なキーワードの1つです。公民権運動のリーダーであり黒人指導者である前に、まずは牧師であり、そして何よりもまず、ひとりのクリスチャンであった King 個人にとっても “fear” は最も重要なキーワードでした。25才で、かの controversial な Vernon Johns 牧師の後任としてアラバマ州モンゴメリーのデクスター・アヴェニュー・バプティスト教会の牧師となった King は聴衆に言います。

When I say to you, “Don’t be afraid,” you know what I really mean: “Don’t even be afraid to die.” I submit to you tonight that no man is free if he fears death. But the minute you conquer the fear of death —at that moment, you’re free. You must say somehow, “I don’t have much money, I don’t have much education, I may not be able to read and write, but I have the capacity to die. And I’ll say to all the members of Dexter Avenue Baptist Church, “The man who will not die for something is not fit to live.”⁴

わたしがあなたがたに「恐れるな」と言う時、わたしの言う本当の意味をわかっていますね。それは、「死ぬことさえも恐れるな」ということです。今晚、わたしはあなたがたに言います。死を恐れるかぎり人は自由ではない。しかし、死の恐怖を克服した瞬間、あなたがたは自由なのです。あなたがたはこう言わなければなりません。「自分はお金を持っていない、ろくな教育も受けていないし、読み書きも出来ないかもしれない。でも、自分は死ぬことが出来る。」わたしは、このデクスター・アヴェニュー・バプティスト教会の皆さんに言います。「何かのために死ぬことが出来ない人は、生きるに値しない。」

その King が大きく関わったアメリカ黒人差別撤廃、公民権運動においても、“fear” は様々な意味においてキーワードです。ここでは、そのなかの2つの意味について触れてみたいと思います。

まず、1つ目の意味についてですが、これは、例えば、日本人が、「黒人は怖い」という場合の“fear”とは異なります。日本人が、もし、「黒人は怖い」とか、それに類することを言ったり、思ったりした場合、それはもちろん差別であり偏見であります。ある意味、それは非常に純

粹で単純な偏見であり差別だと言えます。それに対して、アメリカの白人の黒人に対する“fear”はもっと複雑というか、根拠のあるものというか、歴史性のあるものです。その“fear”を理解するには、例えば、いじめを想像してみるとわかりやすいかもしれません。自分が誰かをいじめ続けると、「いつか仕返しされるのでは」という恐怖が生まれるかもしれませんし、そのようないじめの加害者となったことによる自己嫌悪、また、その嫌悪の対象である自分の目撃者であるいじめの被害者を抹殺してしまいたいという気持ちさえ芽生えるかもしれません。或は、サスペンス劇場よろしく、長年の友人を裏切って殺そうとした時、傷を受けながらもまだ死に切らないでこちらを見やる友人を1秒でも早く殺してしまいたいという気持ちを思い浮かべるのも良いかもしれません。単純化を恐れずに、簡単に言ってしまうと、アメリカの白人の“fear”は「復讐されるのではないか」という恐怖であり、場合によっては、自己嫌悪やクリスチャンとしての罪の意識などがそれにミックスされた感情なのです。たとえ、あるアメリカの白人が個人的には何の差別意識も持っていないとしても、また、万が一にも両親や先祖が人種差別に加担していなかったとしても、過去にあれだけの組織的かつ集団的人種差別という暴力が非常に長い年月に渡って振るわれ続けてきた場合、「白人である私を見た黒人は、私に復讐するかもしれない」という恐怖を払拭することは容易なことではないのです。Kingが公民権運動において、アメリカの白人のメディアにも届くように、黒人に対して繰り返し、聖書のことば、“Love your enemies.”⁵を唱えたことは、そのような文脈で、非常に有効だったわけであり、同時に、Kingの著作やスピーチ、思想のみならず、アメリカの白人と黒人の関係は、“agape”や“redemption”といったことばに代表されるChristianityを抜きに、本当の意味で理解することは不可能だと言えます。

次に、2つ目の意味についてですが、これは、文化的脅威に対する“fear”です。現在の白人のアメリカ世界においては、アフリカ系アメ

リカ人に対してよりも、ラテン系のアメリカ人に対して、より強く感じられている“fear”です。現在のヒスパニック人口の急激な増加に伴うアメリカ合衆国内におけるスペイン語の広がりや音楽をはじめとする文化面でのラテン文化の影響力の増大などがその対象となっています。かつては、アフリカ系アメリカ人の文化が一番の脅威であり、1950年代のアメリカの音楽業界や1960年代のブリティッシュ・インヴェイジョンなどがその代表的な現象の例として挙げられますし、現在もラップ・ミュージックに代表されるヒップ・ホップ文化は多くのアメリカの白人にとって、ゴスペル・ミュージック以上に脅威なのです。それにしても、多くのアメリカの白人の文化的空虚感や文化的劣等感は、非常に深刻なものとなっています。それは、ある意味、アメリカのプロテスタンティズムの生真面目さや厳格さ、お上品さに起因している面があるのですが、かといって、多くのアメリカの白人のクリスチャンにとって、Christianityは文化とは認められないものなのです。彼らにとって、Christianityは何よりも上位にあるものであって、音楽や文学、食事や絵画と決して同列には位置づけることの許されないものなのです。Warren Beatty監督、兼主演の映画 *Bulworth* (1998)⁶のなかで、Warren Beatty扮する白人大統領候補の上院議員 Jay Billington Bulworthが、Halle Berry扮する20代の黒人女性 Ninaに、“I felt insecure . . . Why? . . . I’m white.”（「不安だったんだよ...なぜって...ぼくは白人だから」）と語るくだりなどは、アメリカの白人の孤独をストレートに描写した場面です。

一方、アフリカ系アメリカ人の場合はどうかというと、彼らの多くにとってやはり、Christianityは全てのものの上位にあるものであって、文化とは位置づけられてはいません。ただし、彼らはその教会から文化を生み出していきました。黒人教会の牧師の説教の話術や牧師と聴衆とのコール・アンド・レスポンス、ゴスペル・ミュージックをはじめとして、ソウル・ミュージック、さらに、ラップ・ミュージックにまで黒人教会の影響はおよんでいます。現在では白人の多い教会でも、ロックや

ポップ、カントリー、フォーク・ミュージック調の音楽に基督教の歌詞をつけて、クリスチャン・ミュージックとして取り入れることが当たり前になっていますが、それはあくまでも、教会へ取り入れたのであって、教会から文化を生み出したわけではありません。以前に比べれば、アメリカの教会における人種の混合は進んでいますが、あくまで以前に比べてであって、「少なくとも、プロテスタントの Christianity に根本的な教義上の違いはない」はずなのにもかかわらず、いまだにアメリカの教会がかなりの程度まで、人種別の様相を呈していることは特筆に値すると思われまます。

教会における人種の混合に関しては別の機会に譲るとして、アフリカ系アメリカ人の文化に話を戻すと、しばしば指摘されるように、それは、即興性を重視した文化ですし、それゆえに、ライブの文化でもあります。何を述べるかということと同時に、いかに述べ、いかに語るか、そのスタイルといったようなことが非常に重要な文化です。前述の映画 *Bulworth* のなかで、「白人だから不安だった」と語る Bulworth に対しての、アフリカ系アメリカ人の Nina の answer は、“Oh, come on, Bulworth. You know you my nigga.” です。一般的に、アフリカ系アメリカ人は、語尾の r を発音しない傾向があります。“nigger” と “nigga” を使い分けているのです。強い蔑称である “nigger” をアフリカ系アメリカ人の仲間うちでは、発音の仕方を変えることで蔑称と親称に使い分けているわけです。白人や日本人がいくら “nigga” と発音しても、せいぜい反感を買うのがおちですし、同じ “nigga” の発音でもアフリカ系アメリカ人がつける微妙な発音の仕方の違いは活字で表現することが非常に難しいと思われまますが、とにかく、Nina の “. . . you my nigga.” は、「あなた、わたしのかれよ」くらいの意味です。また、King や Malcolm X のスピーチにしても、活字で追うだけでは理解しきれません。ふたりのそれぞれのあの声や話し方、風貌などそれぞれのスタイルを総合的に観察しなければ、なぜ、ふたりがいまだにアフリカ系アメリカ人のヒーロー

なのかは理解が困難です。そうして、そのような自分と異なる文化的スタイルをいまだに受け入れることが出来ない人は、「受け入れないから心を開くことが出来ず、心を開かないからコミュニケーションがとれず、コミュニケーションがとれないから理解することが出来ず、理解出来ないから恐れ、恐れるから受け入れることが出来ない…」という悪循環から抜け出せないでいるのです。

注

1. Martin Luther King, Jr., *Stride toward Freedom: The Montgomery Story* (New York: Harper & Row, Publishers, 1958)
2. *Stride toward Freedom*, p. 33
3. a Marvin Worth Film, *Malcolm X* (1972)
4. *The Vernon Johns Story* (Big Apple Films, 1994)
NHK 総合、1996年7月19日放送
5. *The New Testament*, Matthew 5: 43—44
6. a Warren Beatty film, *Bulworth* (1998)

文献

King, Jr., Martin Luther. *Stride toward Freedom: The Montgomery Story*.

New York: Harper & Row, Publishers, 1958.

King, Jr., Martin Luther. *A Testament of Hope: The Essential Writings of Martin*

Luther King, Jr., Edited by James M. Washington. New York: Grove Press, 1965.

Malcolm X, and Alex Haley, *The Autobiography of Malcolm X*. New York: Grove

Press, 1965.

映像資料

Worth, Marvin. *Malcolm X*, 1972.

Lee, Spike. *Malcolm X*, 1992.

Fink, Kenneth, *The Vernon Johns Story*, 1994.

Beatty, Warren, *Bulworth*, 1998.